

国を愛する

南	無
善	財

菅原伸郎

教育基本法の「改正」を目指す自民党は、法案に「国を愛する心」を盛ろうとしている。しかし、与党の公明党は戦前への回帰を目指すものとして反対し、代わりに「国を大切にする心」を提案しているようだ。

昨年十一月末に東京で開かれた「教育基本法改正を求める中央国民大会」で、自民党の安倍晋三幹事長代理は「『国を愛する心』の涵養は譲れない一線だ。消しゴムや鉛筆を『大切に』とは言いが、『愛せよ』とは言わない。国家は消しゴムや鉛筆並みか」と友党を批判した。これには翌日、公明党の太田昭宏幹事長代行が「消しゴムや鉛筆と言われて

も」と反論している。

この応酬を聞き、中村元先生の『佛教語大辞典』（東京書籍）で「愛」の意味を調べてみた。「執着すること」「広くは煩惱、狭くは貪欲」「渴望。満足するまでやまない欲望」といった説明が並んでいる。安部氏は「愛する心」の優位を説いたつもりだろうが、仏教の立場からはそれほど立派な言葉とはいえないようだ。

そういえば、「愛国心」という言葉には、国家主義を渴愛し、全てに従わせてやまない、といった響きがある。大東亜戦争肯定論や君が代・

日の丸にこだわる、いわば執着・執念を持つ方も多いのではないか。そんなニュアンスを嫌って創価学会・公明党が「愛」を忌避したとすれば、仏教を奉じる団体としては当然といえよう。

十六世紀、日本にキリスト教を初めて伝えたザビエルらは、ギリシャ語の「アガペー」をどう翻訳するか、苦労したらしい。「エロース」に相当する「愛」が適切でないことは分かっていたようで、当初は「慈悲」とか「御恩」と訳していたが、途中で「大切」という言葉を採用する。新約聖書の「マルコによる福音書」十二章、いまは《心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する》となっている部分は、一五九二

年版の教理書「ドチリイナ・キリシタン」でこうなっていた。

《万事に越えて、デウスをご大切に思ひ奉る事と、わが身を思ふ如く、ポロシモ（注・隣人）を大切に思ふ事これなり》

明治になって「アガペー」は「愛」と訳されてしまったが、「大切」の方がはるかに奥深かった。アガペーや慈悲や「大切」には、その対象に執着したり、排他的だったりする要素がないからだ。悪人でも罪人でもあるすべての人間への、思いやりが大前提となっている言葉なのだ。

自分の欲しいもの、あるいは自分の国を第一に望むことは「愛」に違いないが、釈尊やイエスの教えとは異なるだろう。祖国を捨てたゴータマ・シッダルタ王子はもちろん、イ

エスも親鸞も道元も聖フランチェスコも、自民党の望むような「国を愛する心」の持ち主ではなかった。そうした執着を超えることこそを説いたのである。

先の「教育基本法改正を求める中
央国民大会」は《愛国心と宗教的情操とを涵養する教育が行われ、さらに家庭での教育が充実され、もって次代を担う青少年が、明るく誇り高い日本人として育ちゆくことを強く念願する》という決議文を採択した。教育の基本目標に「愛国心」と

「宗教心」を挙げたわけだが、この二つは矛盾なく両立するものだろうか……。

「愛国心」のある人は、いざという時には、勇ましく、雄々しく、敵兵を撃ち殺すかもしれない。しかし、そのときに「宗教的情操」や「宗教心」はどうなっているだろう。少なくとも「不殺生戒」をいただく仏教徒なら、答えは簡単でないはずだ。

公明党の「国を大切にする心」がどんなものか、私は知らない。しかし、これからの教育はただ「誇り高い日本人」を目指すのではなく、己の過ちも認める謙虚さを基本にしたものだ。それでこそ、釈尊らが説いた「慈悲」や「大切」が育つのはなかるうか。

（すがわら・のぶお／ジャーナリスト）

